

反核医師ジャーナル

第47号

発行：核戦争に反対する医師の会

2002年11月30日

vol.20

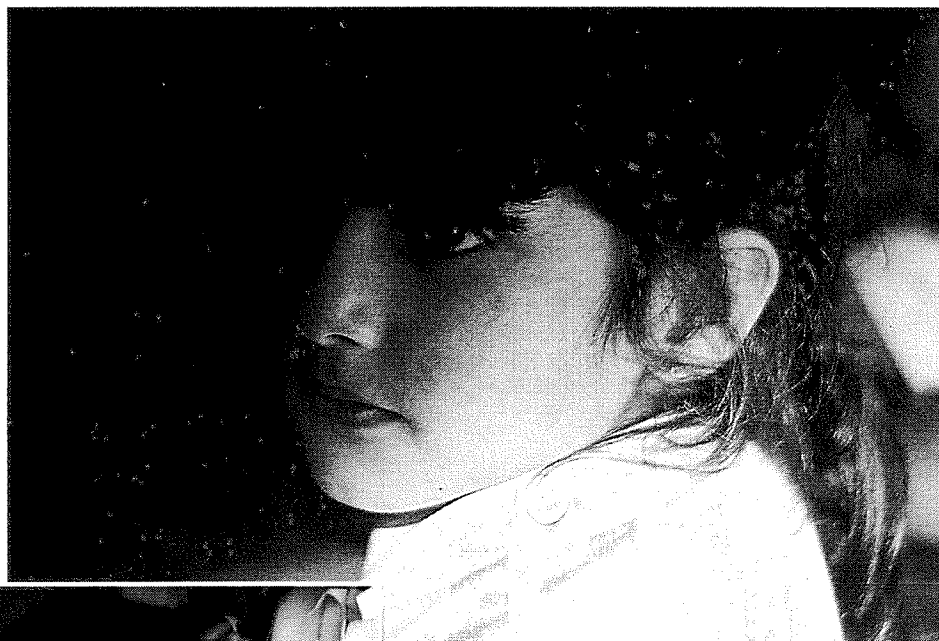
No.2

(名古屋市昭和区妙見町19-2
愛知県保険医会館気付)

TEL052-832-1345

医師の会

20周年記念集会に
会場あふれる一三二人



子どもたちの明るい真剣なまなざしに魅せられて

この子たちの笑顔はどこからくるの？

軍隊をすてたコスタリカでは、国家予算の3分の1にものぼった軍事費を教育費にふり向け、全力で「命を大事にする」教育に取り組んだ。そして、医療や社会保障にも——池田眞規弁護士の講演から

核兵器のない21世紀へ、平和憲法のめざす国づくりは？

コスタリカ

軍隊をすてた国から学ぶ講演会

核戦争に反対する医師の会は、結成二十周年を迎え五月十八日に講演と文化のつどいを開催した。折りしも国会に有事法制が上程され、憲法調査会では改定をめぐる議論がされている情勢であり、会場となった名古屋・中区の「Manahaus」には会場に入りきれないほどの市民も含めて百三十二人が参加した。二ページから、参加者を感動させた池田眞規氏の講演の内容を紹介する。

核兵器のない21世紀へ 平和憲法のめざす 国づくりは？

～軍隊をすてた国から学ぶ～



池田 眞規氏

(弁護士・国際反核法律家協会)

コスタリカがブームになっています。

今どこへ行っても絶望感、閉塞感で先が見えない。政府は停滞、財界も政界も官界も裁判所までおかしくなっている。人類にとって

恐ろしい地獄が目の前にあるような、すごい時代になってきました。

それで一昨年、コスタリカに行きました。「あそこに行けば、何か未来の展望があるのではないか」という気がしたからです。五十年間、軍隊を捨てていても侵略されることはなかった。なぜだろう？いくら資料を調べても学者に聞いても分からなかったので、自分の目で行ったのです。

コスタリカが

軍隊をすてたわけ

一九四九年に軍隊を捨てた解放戦線の議長はドン・ペペ・フィゲレス。五十二年以上前のことですから、これは生き証人の未亡人カレン女史に聞いた話です。

「夫、フィゲレスがいつも語っておりました。殺し合いをしないで紛争を解決する方法はないんだらうか？ 彼はずつと若者たちにも語っておりました」

隣の国も軍隊を持っている。自分の国も軍隊を持っている。利害関係が対立すると戦争が始まる。「戦争っていうのは、殺し合いなんだよ。こちらの国の若者が隣の国の若者を殺しに行く。また、向こう

の国の若者がこっちに殺しに来る、こんなことをして何の役に立つんだ？ そのために国家予算の三分の一を軍事費に使ってしまう。そんなお金があったら、俺たちの生活はもうすこし楽になるのじゃないか？」

これが、彼らが市民戦争と呼んでいる内戦です。選挙で不正があったりしてフィゲレス率いる野党連合、解放戦線が武装蜂起した。フィゲレスはコーヒー園の園主だったので、若者を集めてコーヒー園で武装蜂起した。政権に向けて政府軍と戦うわけです。それで二千人が死んだ。そして政権を奪取したのです。

そのあと彼は、「もう弾圧のための軍隊は要らない。軍隊によつて意見を通すよりは、対話を選ぶ。だから軍隊は要らない」と、軍隊の廃止を宣言しました。翌年の一九四九年、議会を開き、少数党にもかかわらず議案に提案して、憲法で軍備を禁止した。

必要な場合には軍隊を組織することができるという規定も入れてあります。ところが、いまだに軍隊を持つことは実行されていない。市民が、「外国から攻めてきたらど

うするか」よりも、まず「殺し合いをやめよう」という結論に賛成して、国会で通ったのです。

軍隊をすてても国は守れる

「攻めてきたらどうするか」という問題ですが、これは「自分から攻めていかなければ、きつと隣の国は攻めては来ないだろう」という、まったく仏さんみたいな考えです。

まわりの中南米の国はほとんど独裁国です。政権交代は軍事クーデター、武力での政権交代しかない。だけど「俺の国は、武力でなくて対話でやる」という立場の表明です。だから、絶対に独裁国にならないということを証明しなくちゃいけない。独裁国にならないという担保は何かといたら、民主国家をつくる。そうすれば、まわりの国は「あのコスタリカからは攻めて来ない」と確信するだろう。それがまず第一だ。

徹底した対話と選挙

平和外交で

ということ、軍隊を捨てた。そして、民主国家をつくるために何をしたら？ 徹底した対話と理解

を通じて選挙で政権を選ぶ。そういう選挙制度をつくりあげたのです。

選挙は、情実だとか、議会・内閣・裁判所などからの干渉をいっさい受けてはならない。知恵を集めて、「選挙管理裁判所」を別につくったのです。他の権力から財政的にも権力的にも独立しています。それを憲法で保証した。選挙裁判所が、選挙については一切取り仕切るのです。

「へえ、どんなことをやっているんだらう?」。それで、今年の二月、私は四年に一回行われる選挙を見に行きました。

行ってみると、国会は平屋なのに、「選挙管理裁判所」はバカでかいビルです。そこで何をするのか? 全国の何千もの投票所と裁判所とが直接インターネットで繋がって、選挙に関するいっさいの管理です。だから選挙管理裁判所のワンフロアは、コンピュータで占領されている。投票の登録もそこでやります。

選挙運動期間の三カ月は、警察もその裁判所の支配下に入る。警察が入って何をするかというと、選挙運動が妨害されないようにするとのことでした。

子どもも選挙に参加する

いちばん大事だという選挙法がまた面白いのです。完全比例代表制です。小選挙区制、中選挙区制ではない。だから投票用紙は、政党とその代表、政党の旗、政党候補者の写真が入った、B4版くらいの紙です。

選挙運動は、その概念が我々と違います。

選挙の投票依頼の行為は選挙運



動じゃありません。それは無制限

で、年がら年中やっている。投票日には投票所の小学校の校庭でも、自分の支持する政党の旗を振り回しています。もう、投票所のまわりはお祭り騒ぎです。政党ごとに、店を出して縁日状態です。

子どもがまた、投票に大きく関わっています。子どもたちの選挙管理委員会をつくり、みんな投票人になって立会演説までやっている。その「選挙」の結果も公表される。マスコミは、毎回、その子どもたちの投票結果が、大人の選挙の結果とそんなに大きくは違わないというので、選挙の予想を子どもたちの投票の結果で占うのです(爆笑)。子どもたちも小さい頃から選挙に関心を持っている。

市民は自由で強い意見を持って選挙を通じて政府をいつでも変えることができるという保証。その保証があれば民主国家である。周辺の国々は、コスタリカから武力で攻め込まれる心配はない。諸国民の信頼を得ることができるのです。

ユニークな平和外交

コスタリカの「平和外交」がまた面白い。まるで「お助け婆さん」

みたいです。まわりに紛争が起ると、すぐに仲裁に出かけていく大使がいるのです。中南米大使は、国と国とが紛争を始めるとそこへ仲裁に入る。あるいは、内戦を始めると、政府軍と反政府軍の所へ出かけていって、両方の言い分を聞く。それが成功するわけですよ。

軍隊なくして不要になつた予算は教育費へ

コスタリカが、そうやって軍隊を捨てたあと、三分の一の軍事費分は必要なくなつた。これを教育へ最優先に充てたのです。向こう見たところ、教育費は建物にはかけず、人にかけている。軍隊の数ほど教員を育てようというスローガンだったようです。

教育は真剣勝負

小学校の見学で、先生のレベルが高いのに驚きました。子どもと先生の関わりは、真剣勝負です。先生の目つき、子どもの目つきが全然違うのです。

前回の訪問のとき、一行の中に、原爆の被爆者と小学校の先生がいました。各教室を回って最後の五年生の部屋で、「対話をしましょう」

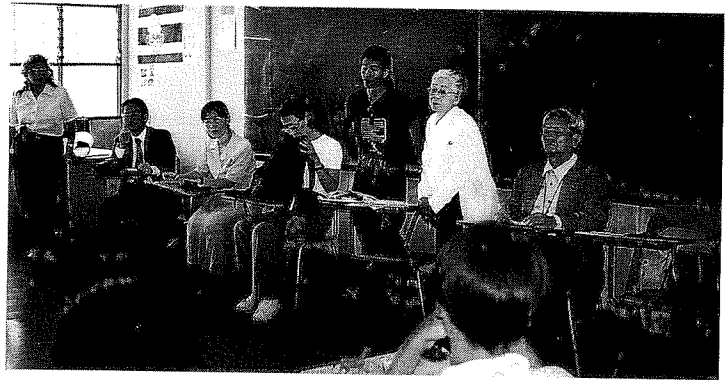
と提案され自己紹介しました。そこで、広島の話をしてくださいと先生に頼まれて、被爆者の女性が、原爆の話したら、子どもたちの顔がガラツと変わったのです。そして話が終わって「質問を」と言ったら、半分以上の手が上がる。

その質問のすごいこと。「そんな爆弾、誰かのために落としたの?」「放射能はどうして体から出ていかないの?」「出ていく薬はないの?」とか、我々も答えられないような質問が出る。最後に、「どうしても」といって手を降るさない子がいた。腕白そうな顔をした子で、彼の質問は、「僕は何をすればいいの?」というのです。私たちは「ギョッ」とした。

同行の小学校の先生は、「どんな教育したら、こんな子になるんだらう?」「日本の小学校ではこんなふうにならないね」と、嘆いているんですよ。

人口の二割が難民—— 荒れた難民の子ども の心も教育で変える

ところが、今年行つて話を聞いてまたびっくりしました。



生徒たちと交流する訪問団

コスタリカは、今だに難民を無制限に引き受けているのですが、ニカラグアの戦争が激しかった頃、国境を越えて難民がぞろぞろパスポートなしで入って来ても国境で止めようとしなかった。その人数も把握していないのです。「五十万人以上いるのは間違いないね」と、のんきなことを言っている。三百五十万くらいの人口で、五十万人以上の難民が入って来ているのに、何人いるか知らないなんて

ね。人口の二割くらいは難民なんですよ。

五、六年前には、教室に難民の子が四割いたという話です。ニカラグアでは、戦争に明け暮れていて食えない。だから子どもたちは、学校へ行かずにメシの食える軍隊に入る。でも軍隊に入ると、銃を持たされて殺しの訓練です。そういう子どもを引き連れて、難民の親たちが流れてくる。学齢期になったら、コスタリカの小学校が受け入れる。この難民の子は、タバコは吸うわ乱暴を働くわ、先生を殴るわ、もう日本の「荒れる教室」以上だったというのです。

そういう子どもたちを、案内してくれたセルバルナス先生たちが、一昨年行つたときのようなクラスに変えてしまったのです。たった五、六年で。どうやって変えたのか? 次のような話をしてくれました。

差別をしない、子どもを人間として見る教育

基本原則を二つ立てた。一つは、難民の子とコスタリカの子を差別しない、一緒に教育するという方針を、第一に確認した。もう一つ

中米の国コスタリカ



は、教える立場に立つて子どもたちを見るのではなく、人間として見る。

そのためには原因をしつかり掴まないと対策が立てられないので、原因探究のための調査活動に入つたのです。徹底的に調査した。先生たちがチームを組んで難民の子どもたちの自宅に行き、お父さんお母さんと徹底的に討論した。「なぜこんな子になったのか」「なぜあなたたちは、そんなふうになったのか」。その結果、世界が見えてきたと言うのです。

人間は何のために

生まれてきたのか？

この子は何のために生まれてきたのか？ 子どもは、生まれてこれから何十年も生きていく。ではこの子をどうすればいいのか？

そういうところまでとことん議論した。そのために、先生たちの再教育もした。「人間とは何か？」「人間の歴史は何か？」「何のために生まれてきたのか？」、こういう勉強をやり直した。そうやって、たった五年間で、我々が前回行っていたにはすごい子どもたちになっ

ていたのです。軍隊を捨てた予算で、最重要部分として充当したのは教育だった。だから、カレンさんの話のように、コストリカで一番大事なのは、政治と教育なのです。

国民の医療費は無料

難民もその恩恵を受ける

その次に充てたのが、社会保障・社会福祉です。

いまコストリカでは、コストリカの国籍があれば医療は全部タダです。病気になるれば病院に行きませんが、手術をしても入院しても全

部タダです。

国立病院の院長先生に会いに行きました。反核医師の会のみなさんは、コストリカに行ったらぜひ国立病院に行ってください。非常に親しく歓迎して、お話ししてくれますよ。

「難民の人たち、子どもたちが来ますか？」と聞いたたら、「来ますよ」と言う。「治療しますか？」と聞いたたら、「しますよ」と、どうしてそんな質問をするんだという顔をする。

「お金がなくてもいいんですか？」
「お金のある、なしは別に、治療を必要とする患者さんが目の前にいれば、医者は治療しなければならぬんです。お金の問題はあとの話です」と言う。コストリカ人なら医療費はタダ。コストリカ人でなければタダではない。でも「お金がない」と言ったら請求できません、と言うのですね。だから、難民が平気な顔をして入院しているわけです（笑い）。

僕らも心配になって「やりくりが大変でしょう？」って聞いたたら、「大変ですよ。でも医療レベルを下げるわけにはいかないうから、病棟の修理なんかは後回しにしたり

してやりくりしています」と言う。

理解を越える

難民への寛容さ

そこで、なぜ難民を無制限に引き受けるのかという問題になりますよね。これが僕らはどうしても理解できない。自分の国はもう社会保障が完備している。そこへ難民が、何十万人とぞろぞろ入ってくる。彼らが病気になるたら、病院で社会保障の恩恵にあずかる。それは国家予算から出すわけでしょう。これをコストリカの国民は支



持しているのか？ということなんです。

憲法にこんな規定があるのです。「政治的理由によって迫害された者にとつては、コストリカは避難所である」（笑い）。特に、命令によつて追放された者が、その国から引き渡しを求められた時はこれに応じてはならない、と憲法に書いてある。

ヴァルガスという国際法の学者で、同時にコストリカの反核法律家協会代表で国際反核法律家協会の副会長もやっている人が、五月に日本へやって来て、各地で対話集会をやったのですが、このことが話題になりました。「基本的に我々はこれを受け入れる」と言う。「どうしても理解できない」と問い詰めると、どうして理解できないのかと困惑するばかりです。しまいに面倒くさくなって「寛容性だよ！寛容性！」と言う（笑い）。「寛容性」で、そんなに損を平気でやるものではないと詰め寄ると、情けない顔をする。それが彼らの感性なんですよ。

命を大事にする

京都へ案内して、宗教者平和協議会のメンバーの清水寺の管主さ

んに会う機会がありました。管主さんが、命と平和のためにと挨拶をされると、彼も喜んで「コスタリカは命を一番大事にします」と言つて、「命を大事にするのが基本ですよね」と、お互いに意気投合している。

「命を大事にする」と言うときに、法律家の感覚は「人権を大事にする」ことです。

これが、彼らにとって、自分の命は大事、家族の命も大事、隣人の命も大事。「命が大事」は無限に広がっていく。で、難民で入ってきた人たちの命も大事。「難民の人たちも、コスタリカに五年居れば国籍が取れるんだよ。いずれコスタリカ人になるかも知れないじゃないか」と、平気な顔をして言うのです。

彼らの国は死刑廃止です。死刑廃止をいつやったか？ 革命後か？ 「十九世紀後半にやっています」なんて言う。だから、かなり古い時代からお互いの命、人間の命の大事さというものについて知っていたようです。

そのあたりの意識が、コスタリカの人たちの典型的な例と言えるようです。

対話で育む創造力

「対話をしなさい」「意見が違うのは当たり前」「意見が違ふときには当たり前」「意見が違ふときには当たり前」暴力で解決してはいけません。対話をしなさい。どうしようもないような意見の違いでも、相手も意見をそれなりに言う権利はある。対話で解決しなさい。こういうことを、子どもが小学校の頃から教え込むのです。

それで、物を見る場合、客観的に見なさい。誰それが言ったということではなくて自分の目で確かめて、批判的に物を見なさい。こういう教育をした。

知識を与える、暗記をさせる、こういう方法で考える能力を育てるのではなくて、対話をしながら、客観的に物を見ながら、人と議論をして正しい結論を出していけるよう考えさせる。つまり、創造力です。

先生は、生徒を人間として教育しよう。長い人生のスパンで、どう行動すればいいか。だいたい小学校を終わる頃までに、その子どもが自分の未来について希望ももてる、希望を語るようにしていく。学ぶことは希望を語ること、教え

ることは希望を見つけ出すことだ。だから彼等は、いつも「希望」を聞くわけです。

軍隊をすててアメリカと対等になったら？

カレンさんが言いました。

「私も、軍事力ではこんな差があつたけれども、軍隊を捨てたらアメリカと対等になれました。対等になれば「アメリカさん、あんたの国は国外に基地を持つているのはよくありませんから返してください」と言える。「だから日本も、軍隊を持つのをやめなさい。そうして、アメリカと対等の話し合いをして、『沖繩の基地をなくしなさい』『帰ってください』と言えばいいじゃないですか」って言うんです。

ヴァルガスは、沖繩に行ったことがある。「沖繩にあんなに基地があるなんて、これは主権の侵害だ。アンフェアだ」「あんなものを、五十年も外国に置いておくなんておかしい。これはねえ、交渉した方がいいですよ！」（爆笑）って言います。その意味は、軍隊を捨てれば交渉できるよっていう意味です。

「コスタリカは永世中立国」

コスタリカは、モネ大統領の時に永世中立を宣言しています。モネ大統領はまだ生きていますので、私も会いました。「事前にペンタゴンの密使が来た。中立宣言するのはやめる！と説得に来了。私は、断りました。そして中立宣言を出しました」「だから、アジアで日本が中立宣言をするとしてもいいよ」と言う。

「今のアジアで日本が中立宣言をすると、中国にもアメリカにも両方に味方しないことになるから、中国にとってもアメリカにとっても攻撃する紛争の種がなくなる。日本が、アメリカと中国や北朝鮮との対立関係に、『中立だぞ』と言ってしまったら、アジアの緊張緩和に貢献するじゃないか」。

経済力もある。教育水準も高い。それに日本は最初の被爆国だ。世界で最初に、あの核兵器の攻撃を受けた経験を持っている。だから「戦争をやめる。俺は中立だ」と言えば、アジアはもう、ガラッと変わるぞ（笑い）、と言って、夢を語ってくれるのです。

軍隊よりも強いもの

彼らは、私たちが捨てた「心」を非常に大切にしています。

「日本は経済、技術、いろいろ進んでいます。一つの家にテレビが三つもある家もあるそうですね。車を二台も持っている家があるそうですね。だけどそれは、『進歩』とは言わない。心が欠けています、日本は。アメリカもそうです。」

そして、「進歩」とは、人間にとって進歩か、人類にとって進歩か、そういう基準で考えるべきではないかと、まるで禅問答みたいなこ

とを言うわけです。

平和の文化を、どうやら五十年かかってつくりあげた国がこの地球上にある。「備えはなくても憂いはないよ」(笑い)ということですね。

ヴァルガスがあちこち回って、大阪で、子どもたちと会話したとき、「軍隊はないよ」という話に、「軍隊がなくて心配はないの?」って聞かれた。「心配ないよ」「どうして?」「軍隊よりも強いものがあるんだよって子どもに説明したのです。」

「ヘーッ、軍隊よりも強いものって何だろう?」「それはね、軍隊をずてることだよ」って教えた。これは素晴らしいエピソードです。

I P P N W 第15回ワシントン大会

世界大会に出席して

堀場 英也

五月二日、成田空港に集合。出発に当たっての出国の荷物検査は厳重だった。スーツ・ケースにはいつものように「牛刀」一本が入っているの、私から検査員に説明。

「まな板」もあり、納得を得た。

隣で山上副団長が取り調べられ、七徳ナイフが手荷物に入っており、別のバックケースに入れられました。後日、ワインのコルク抜きをお借りしました。

松井団長と小池参議院議員が先



会場ロビーでPR活動、左が筆者

発されていました。自己紹介を終わって出発。室生夫妻、向山事務局長、武居・真鍋知巳・真鍋穰医師、重松・野崎通訳など知った顔ぶれもあり、総勢二十一名。日本支部から、大阪の岩崎・小田医師、京都の三宅夫妻など知人も多い顔ぶれでした。

シカゴで中継。窮屈なエコノミーで長時間のフライトは大変疲れました。時差があり、二日の夕方にホテルに着く。松井・小池氏の顔もあり、ほっとした。この後、小池氏の案内で、中華料理店で夕食。あと「ホリ」バーを開店する。日本ウイスキーと「たくわん」などの歓迎パーティーで疲れをとる。

五月三日、朝食は変りばえしないが、入口で老黒人の焼く玉子焼きがとてもおいしい。玉ネギ・ハム・トマト・チーズなど、我々の要望でいたため内容となる。

開会での、アッシュフォードIPPNW共同議長の挨拶は、名指しこそしないが、痛烈な批判が拍手をうけていた。我々はロビーに机を出し、折り鶴の指導や、ヒロシマ・ナガサキアッピールの署名。原爆写真展も展示。出入口の本部の机を半分ほど侵略?して頑張りました。

講演の内容は、二人の通訳の声が我々のイヤホン(故河野和夫氏の寄贈による)でピンピン伝ってくる。昼食はバイキング形式。但し、飲物(ビール・ワイン・ウイスキーなど)は実費。ビールは小ビンで凡そ五ドル。女性もラッパ飲みをするという習慣ありとおどろいた。

出席は三十三カ国、医学生を含め約四百名。本部の職員は忙しくて、お隣が時々留守になり、私が書籍などの代金の受け取りを代行した。お礼に一冊書籍をいただいた。また、神奈川協会の莊加昭二氏が、平和遺族会からの依頼で靖

国問題を和文・英文で対比させた書籍を百冊、無料配布。外国の人々によるこぼれた。

午後は、我々は地域会議に出席。北アジア地域会議は、日本支部を含めて、日本からの医学生も含めて約四十名でした。残念ながら南北朝鮮からは一人も参加がなかった。

五月四日は、ジョセフ・ロートブラット卿の格調高い発言は会場全員に深い感動を与えました。医師として科学者として、この情勢をどう捉えどう運動すべきかを話された。全員スタンディング・オベーションで応えた。

午後はNPR（新しい核兵器および新戦略）の分科会に参加。米国の欺瞞（ぎまん）性を三人のコメントーターが、鋭く批判。特に若い女性の質問が時間いっぱいまで続く。小池議員から日本における運動の状況が力強く語られ、沢山の拍手があった。次期第十六回の開催国、中国のルー・ルシヤン会長の発言があり、しめくくりはマレーシアのマツコイ会長（次期・単独会長）の発言があった。米ロの声明（五月二十四日発表）もあり、米国の覇権主義の状況がより

鮮明になった。日本での運動が、今更ながら世界の反対運動の源泉と感じた次第でした。五月五日は閉会式があり、すべての行事が終った。

吾々は仲間といっしょに地下鉄で移動。私は「握り寿司」とキリンビール（小びん）を飲んで、久しぶりにくつろぎを得た。この後、沖縄の西銘圭蔵Dr.とスミソニアン（国立自然史博物館）を見学。約三時間近く館内を見学。巨大アフリカ象の剥製に驚く。ナポレオンがマリールーズに贈った王冠や一二七カラットの世界最大のダイヤをみた。恐竜の化石など、規模の多様性・大きさは世界一を目指している米国のスピリットか。起源はイギリスの科学者ジェームス・スミソン（一七六五年生）が、スミソン家の財産すべてを「アメリカ合衆国」にゆずると遺言した。当時の五十二万ドルが基金となつて、十一の博物館・美術館と動物園まであると。

夜は、ザ・ダンシング・クラブという名の「カニ料理」店で、打ち上げパーティーを開く。そのあとの「ホリ」バーもAM三・〇〇までで閉店。やつと、日本に無事、帰国できた。お疲れさまでした。

松 山

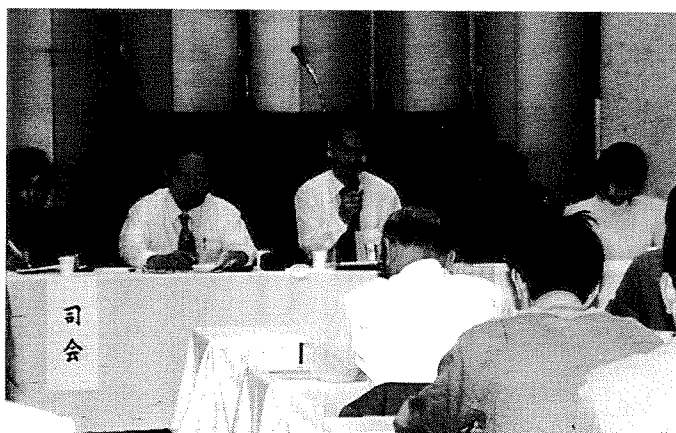
第13回反核医師・医学者のつどいに全国から180人

有事法制反対、米のイラク『先制攻撃』にストップを

「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者の集い」は十月十九日―二十日、四国・松山市の奥道後温泉で第十三回のつどいを開いた。これには全国から医師・歯科医師・医学生ら百八十人、愛知からは二十代の若手医師も含む九人が参加した。

一日目は、愛知の反核医師の会でも五月十八日の二十周年記念集会で、池田眞規弁護士（講演で話題を呼んだコスタリカを、ドキュメンタリーで描いた映画『軍隊をすてた国』）を上映。引き続いて行われた記念講演では、俳優の目黒ともろさんと広島修道大学・岡本三夫氏お二人の話を聞いた。

二日目は、①被爆体験を語りつぎ平和運動を広めよう、②「えひめ丸とグリーンビル」事件から見る「軍隊の本質」、③有事法制を考える、の三つの分科会に分かれて、それぞれ話題提供と報告を受けな



がら意見交換を行った。

また弁護士から、被爆者が全国的に取り組もうとしている原爆症認定申請・集団訴訟への協力の訴えがあり、最後に見出しの内容のスピーチを採択して「つどい」を終えた。

「医師・医学者のつどい」 平和を愛する医師の輪 を広げよう

(愛知民医連・研修医)

橋本 政宏

十月十九日(土)～二十日(日)に松山市奥道後にて開かれた上記つどいに参加させて頂きましたので、第一日目の参加報告を致します。

まずドキュメンタリー映画「軍隊をすてた国」の上映会があり、その後、藤田実行委員長の挨拶、大場常任世話人の基調報告と続き、日色ともる氏(俳優)と岡本三夫氏(広島修道大学)の二つの記念講演がありました。

日色氏の講演「さわやかな心大切に」は、俳優になるに至ったきっかけが小学校の時に観た原爆の映画で心打たれたことにあること、演劇を通して原爆の問題に取り組み続けていることがいきいきと語られ、素晴らしかったです。とりわけ、途中おりまぜられた朗読が強く印象に残りました。日色氏がずっと取り組んでいる朗読劇「こ

の子たちの夏」やいろいろな詩の朗読が行われ、ハンカチで涙をぬぐったり、どっと笑ったりといった光景が会場のあちこちで見られました。

岡本氏は「二十一世紀にむけて核廃絶をめざす市民運動」と題して講演し、平和学の立場から「進歩的知識人のゆるやかな連帯」の必要性を訴えました。動員型の活動だけではだめで、ボランティア教育の大切さを述べておられました。

十九時から行われたレセプション



ンでは、立食パーティ形式で食事をしながら和やかに交流しました。舞台では各地の紹介が次々に行われ、愛知参加者も前に出ました。

古橋功一さん(名古屋大学)と私の二人の青年医師が参加しているという事で、そろって挨拶させて頂いたきました(写真上)。

まだまだ青年の参加が少ないのが現状ですが、知り合いの研修医や医学生にも何人か出会うことができ、うれしかったです。核兵器を憎み平和を愛する医師の輪をもっともつとひろげなくてはと思った次第です。

「えひめ丸とグリーンビル」 事件に見る「軍隊の本質」

(名古屋大学大学院生)

古橋 功一

「つどい」二日目の午前、三つの分科会が開催されましたが、愛媛県開催という、ご当地ならではのテーマである、「えひめ丸」事件の分科会に参加しました。二〇〇一年二月十日(日本時間)に起こった当事件はご存知の通り、宇和島水産高校の実習船が、米軍の

原子力潜水艦に衝突され、沈没し、高校生四人を含む九人が犠牲になるという、衝撃的な事件としてここに刻まれています。分科会では、犠牲になった当時十七歳の寺田祐介君のご両親、当初からこの事件を詳細に追いかけてきたジャーナリストの北健一氏のお話を聞くことができました。

民間人有力者を乗せた体験航海での緊急浮上、ソナーの記録の不合理性など、問題があったと思われる潜水艦の航海実態の解明も、軍事機密という壁に阻まれ、艦長だったワドル氏も軍法会議にかけられることもなく名誉除隊となるなど、米軍の対応はご両親の怒りと悲しみを増すばかりでした。しかも、地縁・血縁の濃い保守的な土地柄で、近所や親戚筋、あるいは行政からの有形無形の圧力があるなかで、あくまでも大切な息子の命の証として、真相解明・再発防止を望み、県の弁護士ではそれは不十分と、少数の遺族で新たな弁護士を委任しました。このような会にも積極的に出席し、思いを述べるなど、社会的な働きかけが続けているご両親の姿は、参加者の感動と涙を誘いました。

また北氏は、ソナーの記録の問題や、艦長の不自然な証言など、衝突にかかわる謎についての説明にとどまらず、犠牲者の家族や、生存者のこころの傷のフォローについて、教育船でありながら、船員の不安定な身分や水産物の売り上げで教育費を補う制度があることにより、漁獲優先で安全性を二の次にした、実習船の設計構造の問題など、全国的な報道ではあまり知られていない周辺情報まで、詳しく解説していただき、改めてこの事件の根の深さを思い知った次第です。

この事件を通して、やはり軍隊は人を殺すもので、守るものでないという、「本質」が改めて思い知らされたと思います。冷戦後、唯一の超大国として、二十一世紀の帝国主義国として、強大な軍事力を背景に、我が物顔に国際政治を支配し続けている米国は、核兵器の使用も辞さない脅し、また他国への干渉を進めようとしています。その動きに有事法制で応えようとする小泉政権の危険性を見逃すことなく、反核・平和への志をさらに飛躍させようと決意して、松山の地をあとにしました。

第13回 核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい・アピール

(2002.10.20)

全国の医師・歯科医師・医学者、医・歯学生みなさんに訴えます

今、核軍縮が危機に瀕しています。90年代には、世界は核廃絶へと確実に前進しました。しかし、21世紀になって米国のブッシュ政権は核軍縮への道を大きく後退させ、最近では、核兵器を通常戦争でも使おうとしています。

昨年アメリカで起きた同時多発テロでは多数の民間人が犠牲となりました。ブッシュ大統領は、その報復として「テロへの戦争」を唱え、さらには核使用を含む圧倒的軍事力によるアメリカ一国の世界支配を公然と主張しています。

テロへの戦争としておこなわれたアフガニスタンへの猛烈な空爆では多数の民間人が犠牲となり、農地や道路などのインフラは壊滅状態となりました。しかし、テロリストは壊滅するどころか、世界各地でテロを多発させています。軍事行動は、憎しみと暴力の悪循環を呼ぶだけです。

アメリカはイラクに対してテロリスト支援や大量破壊兵器開発をしているなどの理由をつけ先制攻撃を加えようとしています。核使用も計画されています。核兵器は、テロを口実に新たな役割を担わされようとしています。テロに使用される危険性もあります。核がある限り、使用される可能性はなくなりません。核保有国は核不拡散条約(NPT)第6条を遵守し、直ちに核廃絶への取り組みをはじめるべきです。

テロ対策に必要なことは法に基づき裁きと、温床となっている貧困問題などを国際協調で解決することです。アメリカがイラク先制攻撃計画を中止し、国連を中心としたテロ対策、核査察、紛争の平和的解決などに中心的役割を果たすように求めます。

アメリカ政府は、北朝鮮が核兵器を開発していることを認めたと発表しました。このことは両国がどんな意図をもつかは別にして、核兵器問題を国際政治の取引の道具にしていると思わざるをえません。私たちはあくまでも両国が加盟する核不拡散条約を遵守し、核兵器廃絶に誠意をもつてのぞみ、核兵器の永久廃絶に努力することを要求します。また、先の日朝首脳会議では核問題での「国際合意の遵守」が確認されました。

日本政府は、これをさらに発展させ、北アジアに非核地帯を作るためのイニシアチフを取るべきです。

政府は依然として被爆者には不当に厳しい態度を取り続けています。被爆者は2次に及び原爆症認定集団申請をしました。また、在外被爆者には、渡航費支給などの支援は約束したものの、被爆者援護法の適用を認めず手当の支給を認めない方針は変えようとしません。被爆後57年が経ち、被爆者は高齢化しています。至急の解決が必要です。引き続き支援活動が続けましよう。

有事関連法案が「備えあれば憂いなし」の言葉の下に、成立させられようとしています。しかし、今必要なことは、憲法第9条の精神に基づき、近隣諸国をはじめすべての国と互恵を基盤とする友好関係を築き上げることです。無用の軍事的緊張を招く有事法制に強く反対します。

日本政府は、口では核廃絶を唱えながらアメリカの核兵器容認の姿勢を続けています。非核三原則を法制化し、アメリカの顔色を伺う核軍縮でなく、唯一の被爆国政府に心ざわしい核廃絶への道を歩むことを求めます。

IPPNWは世界の反核医師を代表し、ブッシュ政権の暴力主義的政策こそ市民をテロの危険に曝すものだ、理性的かつ機敏に対イラク戦争反対を世界に訴えています。この反対運動を全力で支援しましょう。

核兵器は人類の生存を脅かすものであり、その廃絶は重要かつ緊急の課題です。この四国、松山で私たち「第13回つどい」参加者は核廃絶に向けて努力を続けることを改めて決意すると共に、全国の医師・医学者に医師として核の惨禍と予防(廃絶)の重要性を周囲に訴えるよう呼びかけます。核兵器いらんぞなもし！核兵器廃絶と平和の軍みを世界中の子供達に伝えましよう。

●会費納入のお願い●

二〇〇二年度の会費の納入をお願いいたします。郵便振込用紙をご利用いただくか、次の銀行口座あてお振り込みください。

UFJ銀行・八事支店 普通預金108-297
「核戦争に反対する医師の会」

*すでに納入済みの先生につきましては間違いやご不明の点などございましたらお手数ですが下記あてお問い合わせください。

☎052-8332-1345